生活やものづくりの学びNet ニュース

第 13 号
2017 年 7 月発行

巻 頭 言

生活やものづくりの学びネットワーク発足の意思を受け継ぎ発展・充実へ

東京学芸大学名誉教授　　大竹　美登利

生活やものづくりの学びネットワーク（以下「会」と称す）の設立総会が開催されたのは 2010 年 9 月 19 日であった。2008 年に告示された学習指導要領では、OECD の主催する学力テスト PISA の成績が下がったショックの後で、経済発展に資する学習に重点がおかれたものとなった。経済発展だけでなく、人間性を培う生活やものづくりなどの学びも重要であり、学校教育で保証されるべきである。今後の学習指導要領改訂に向けて、こうした考えに賛同する者（組織）たちが一緒になってその学びの重要性とその充実を世間に訴えていくことになった。

生活やものづくりの学びを学校教育の中で中心的に担っているのは家庭科、技術・家庭科であることから、日本家庭科教育学会の理事会で話しあいを重ね、その必要性を確認し、他の学会などに参画を働きかけて、本会が誕生した。当時（一社）日本家政学会の会長であった私にも呼びかけ人になってほしいという要請があり快く引き受けたが、それとともに日本家政学会の理事会にも参加を要請したところ、団体会員になることを快く承諾してくれた。生活やものづくりの学びが重要であるという、こうした団体会員、個人会員の一致した考えが、この活動を支える原動力になってきた。

本会は団体会員から推薦された者が世話人会を構成し、会を執行していた。また会を運営する実行委員会と、各県で活動するエンパワーメント委員会が組織された。鶴田敦子氏は初代世話人代表として、伊藤葉子氏はエンパワーメント委員会責任者として、何もないところからの組織を立ち上げる大変な時期を担っておられた。そのおかげで今の会があると言えよう。

この会では、中央教育審議会やその周辺の方々に生活やものづくりの学びの重要性を訴えることを活動の中心においたが、それだけでこの学びが充実するわけではない。この理念が日本中の人々に理解され支持されてはじめてこの学びの充実につながっていく。そのために各県に置かれたエンパワーメント委員は、一人で孤軍奮闘している技術・家庭科の先生方が積極的意欲的に学びを担える力を育み、また地域で生活やものづくりの学びの重要性を理解する会の賛同者を増やしていく役割を担った。

私は鶴田氏の後を受けて世話人代表を担うことになったが、会を立ち上げた時の話し合いに参加していなかったので、会の真意をどこまで理解しているか不安であった。幸いなことに会を立ち上げた人々が事務局を組織し、会の運営を全面的にサポートしてくれたので、手探りながらも何とか会の運営をこなすことができたと言えよう。

まだまだ会の組織基盤が確立していない中で、エンパワーメント委員会と実行委員会の2つの委員会を活性化させていくことは、大竹の力量では難しかった。そこで、2つの委員会を合体させた各県実行委員会を作り、地域での活動を担ってもらうことにした。一方、全体の運営は事務局と全国実行委員会を世話人会に統合し充実させた。この改革が良かったかどうかは分からない。しかし、少額だが支援金を出すこともしたため、いくつかの県では地域に密着した生活やものづくりの学びを展開している。例えば学童保育で編み物などのものづくり教室を行ったり、社会教育施設の調理室を舞台に地域の子ども料理教室を開いたり、地域の生活文化を学ぶ会、授業に役立つ研究会などが展開されている。まだまだ全ての県で取り組まれてはいないが、これらの活動がさらに広がっていくことを期待したい。

これらの活動のおかげだけとは限らないが、生活やものづくりの学びは大切だよねと言ってくれる人が確実に増えている気がしているし、今年 3 月告示の新学習指導要領でも、家庭科、技術・家庭科の授業時間はこれまで通り確保された。さらに生活やものづくりの学びが充実するためにも、この会がますます発展することを願っている。

【2017 年度実行委員会のお知らせ】

★以下の通り実行委員会を開催いたします。
ご参集くださいますようお願いいたします。

日時：　2017 年 9 月 24 日(日)11:30～12:30
場所：　東京家政大学（東京都板橋区加賀 1-18-1）
　　16 号館 2 階　162A 講義室

議題
1．各県の学習交流会実施報告ならびに実施計画
2．意見交換
3．学習交流会開催助成金（１万円）の支給について
4．その他

2016 年度各地区の活動報告

秋田県の活動報告

例年この時期に行われる秋田県家庭科教育研究会との合同研修会を、以下の日程で開催しました。

1　日　時　平成 28 年 10 月 15 日（土）～10 月 16 日（日）
2　場　所　秋田県鹿角市
3　参加者 10 名(小学校・中学校・高校・大学教員)
4　内　容
①茜染め体験
草木染むらさき・あかね工房でストールと手ぬぐいを染色
　於「関善にぎわい屋敷」
②ポスター発表
　○「小学校家庭科における生活実践力の向上に関する研究」
　　湯沢市立川連小学校教諭　　菊地教子
　○「家庭基礎」における探究と協働の力を育む授業デザイン
　　秋田県立角館高等学校教諭　小松国子
③昔語りの夕べ　鹿角の昔語り鑑賞
④親睦交流会
5　感想等

本研修は県北部の鹿角市を会場に、茜染め体験とポスター発表を中心に開催され、県内各地から小学校・中学校・高等学校・大学の教員 10 名が参加しました。第一部の茜染め体験は、鹿角の伝統工芸「紫紺染・茜染」の伝承と復活を目指して活動している「草木染むらさき・あかね工房」で行われ、ストールと手ぬぐいを染色。独創的な絞りの技や染めを体験しました。

茜染め体験

「草木染むらさき・あかね工房」で、絞りの作業をしている皆さん

皆、おしゃべりをする余裕もなく、真剣に集中して取り組み、改めて「ものづくり」の魅力や楽しさを再認識する機会となりました。その後、紅葉が見頃になり始めた湯瀬渓谷の温泉宿に移動。鹿角が発祥の地と言われている「きりたんぽ」や、地元の食材をふんだんに取り入れた夕食を堪能し、親睦を深めました。

第二部は、ポスター発表。秋田大学大学院に学ぶ現職教員の発表と質疑応答が熱心に行われました。テーマはいずれも日々の授業に活かすことのできる内容であり、その研究成果を校種を超えて共有できることに大きな意味があると感じました。

また、夜は鹿角地方に伝わる昔語りを楽しみました。鹿角には、旧南部藩の影響を色濃く受けた独特の方言や言い回しがあり、食や工芸、生活文化を含めて、同じ県内でも地域性があることを実感することができました。また、家庭科教員が地域の伝統工芸や文化等を学ぶことの重要性についても痛感した次第です。

個人的には、早朝の露天風呂で野生の狐に遭遇するという思いがけない出会いがありました。また、十和田八幡平国立公園として名高い八幡平の青空に映える素晴らしい紅葉を満喫することができ、心に残る素敵な研修会となりました。

（文責　佐々木信子）

山形県の活動報告

今年度は、12 月 23 日（金）山形大学を会場にして教員を対象とした研修会を開催しました。参加者は高校教員 5 名、大学教員 1 名、大学生 6 名の計 12 名です。

研修会は 2 部構成で、前半は山形大学地域教育文化学部食環境デザインコースの学生 3 名の卒業研究中間発表を行いました。テーマは①山形県における食育の実態と課題、②高校家庭科における食生活領域の学習指導の課題、③大学生の防災と非常食に関する意識といずれも家庭科教育に関連する内容です。なお、①は山形県内の小学校勤務の栄養教諭の先生方、②は山形県内の高校家庭科の先生方のご協力を得て行ったアンケート調査結果のまとめです。

後半は 1 時間弱と限られた時間内で、被災体験ワークショップを行いました。高齢者や色覚障がい者、幼児を連れた人、妊婦、ペットの猫を連れた人など多様な避難者になりきっていただき、教室を避難所に見立てて簡易トイレの組み立て設置や段ボールベッドの組み立てを行いました。備えの必要性を実感し、備えにより被災時の生活ストレスを最小限にできることをご理解いただけたのではないかと思います。さらに、一般的な非常食として乾パンとアルファー米を試食しました。簡単な体験を授業の導入として、小・中・高校それぞれの発達段階に応じた防災・減災の視点での家庭科学習を展開してくださることを期待しております。

今年度山形県南陽市で開催された北海道・東北地区小学校家庭科教育研究大会では、小学校と中学校の連携が研究テーマとなっていました。小・中・高の学習内容の連携が一層求められています。今後も学校種を超えた研修会を企画し、情報交換や親睦をはかりながらネットワークを広げていきたいと思います。

（文責　山形大　石垣和江）

福島県の活動報告

ネットワーク福島では今年度大きく2種類の活動を行った。それぞれの概要を報告する。

1．2016 年度 1 回目は、子どもワークショップ(小学 1～4 年生対象)として「ももをつかったおやつとももものジュースをつくろう！」を開催した（於；福島駅前「こむこむ」子どもキッチン）。福島では 8 月初旬から桃が旬を迎えるが、今回は 8 月最後の桃を使って桃のタルトと桃のジュース作りを行った。

ワークショップへの応募者は 64 名あったが、部屋の許容範囲からやむなく抽選となり 16 名に絞った。内訳は、小学 1 年生 3 名(男子 1・女子 2)、小学 2 年生 4 名(女子)、小学 3 年生 4 名(女子)、小学 4 年生 5 名(男子 1・女子 4)であった。これらを 4 つの班に分け、学生又はネットワーク会員が各班に 1 人ずつ付いて支援に当たった。各班とも年長者が主導しながら各自が役割をもって活動した。今回で本ネットワーク福島のワークショップ開催は 13 回目となった。

2．2 回目は、JICA 二本松職員でモンゴル語教師のダムバダルジャー　ナランツェツェグ氏を講師に「子どもの教育・子育てにおいて大切なこと～モンゴルと日本の生活を通して考える」をテーマにお話いただいた。ナラン氏は日本滞在が 25 年になるが、日本の子どもの忙しさ（宿題が多い、家庭で家族とゆっくり過ごす時間ないことなど）を指摘し、生きる力の育成が必要であることを力説された。その点で家庭科は最も重要な教科であることもお話されたが、モンゴルでは家庭で鶏 1 羽の解体を行うのが普通であることも紹介された。日本においては調理の材料もすべて整った形で売られており、子ども達は当たり前のようにそれを使って調理を行うが、それだけでよいのか等々考えさせられる講演となった。参加者は 12 名であったが、後半の質疑は活発に行われた。 以上の活動の様子は H.P にも掲載している。→https://smnfukushima.jimdo.com/

（文責　浜島京子）

山梨県の活動報告

山梨県の活動として、2016 年 11 月 19 日に大学教員 5 名、小学校 1 名、中学校教員各 3 名、計 9 名が参加し、山梨県家庭科研究会（略称ヤマカケ）との共催で、山梨大学において交流研究会を実施しました。

初めに、山梨大学の神山久美先生より、ミニレクチャーとして、「消費者教育について～国・山梨県の動きと家庭科の授業づくりに向けて～」について、お話をいただきました。まず、消費者教育の基本的概念から消費者教育推進の国や山梨県の動きについて、説明をいただきました。神山先生が山梨県の県民生活センターで作成した小・中・高等学校教員向け教材を紹介いただき、Web 上で公開されている山梨県の教材等々を実際に取り上げながら、小・中学校における消費者教育のあり方について、ご教授いただきました。特に消費者教育で意識して欲しいこととして、「買い物の社会的な意味」の理解をあげ、毎日の買い物は事業者に対する「お金の投票」なのであることを理解させ、小学生・中学生のうちから、消費者の市場参加者としての能力を向上させることが必要であるとお話しいただきました。授業づくりとしては、これまでの家庭科の授業や地域の活動に消費者の視点をプラスすることにより、消費者としての実践的な力が育まれるとのことで、参加者からは、消費者教育が重視されている現在、より身近な題材を取り上げながら授業実践に取り組んでいきたい等々、意見が出されました。本学の卒業生が考案した授業案等も Web 上で公開されているとのこと、和やかな雰囲気の中、小中学生の現状を踏まえながら、授業開発していくことの重要性が話し合われました。

最後に、フリートークとして、小・中学校や大学が抱えている課題、家庭科教育の課題等を話し合い、交流研究会を閉じました。来年度は年2回以上の交流研究会の実施を計画しており、山梨県内に広く参加者を募っていきたいと考えております。

（文責　山梨大学大学院　志村結美）

千葉県の活動報告

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、2017 年 3 月 29 日（水）千葉大学にて、ワークショップ「味覚教育で何が変わるー指導のポイント、評価をどうする」を開催した。佐藤雅子先生（成田市立公津の杜小学校）と佐藤孝子先生（袖ヶ浦市立蔵波小学校）のお二人を講師に迎え、実践を中心にお話しいただいた。参加者は 15 名であった。

佐藤雅子先生の第一部では、まず①2つの色から想像するもの、②3 つの風景写真を見てイメージする地方や料理、③2つのコップに入った飲み物から味がどのように感じられるか、などのワークショップを通して、感じ方は一人ひとり違っていること（他者理解）、個人でも経験や体調等によっても違うこと（自己理解）を確認しあった。五感を使った味覚教育を家庭科の授業に取り入れるとき、評価してはいけないところ（味覚教育ではとても重要）と評価をする観点について、食・消費生活領域での授業実践から具体的に示していただいた。

佐藤孝子先生による第二部では、「味わって給食を食べる取り組み」の実践について伺った。味わいカード（感想カード）を活用することで、子どもたちの食べ物への関心や向き合う姿勢が変化し、それに伴い孝子先生のクラスでは給食の残菜がほとんどなくなったという。ここでは「味わいカード」を評価しないことがポイントである。また、味わいカードを継続して取り組んだことにより、言葉や文章の豊かさが増したこと、思考力の向上など

国語や社会などの他教科への効果も見られる。子どもたちの作成した「オリジナル詩集」や「味わいカード」ファイルを見せていただき、実感した。

参加者からは「2 つの素晴らしい実践を伺いとても勉強になりました。感覚を磨くこと（知識ではなく）、そして味わうことが他の教科の学びにつながること等々、日ごろ自分で疑問としていたことが今日のワークショップを通して確信することができ、嬉しかったです。」「自分も試してみたくなる実践発表でした。食『五感』が食生活だけに終わるのではなく、他教科、環境、生き方、全てにつながることが再度確認できました。評価が無理なくできていることも流れを感じました。」「『目から鱗』の実践です。私は中学校担任です。給食の準備が遅れ『早く食べて』『次の掃除に間に合わないよ』の繰り返しの日々です。まずホワイトボード等に書いて掲示することからスタートします。家庭科担当でありながら食の『味わい』を育てていない自分を反省しています。」「子どもが安心して自分の感覚を表現して自分の感覚や感性に気づき、他人の感覚が自分と違うことを知り、『違っていて当たり前なんだ』と自分と他人をともに受け入れられる、というところがとてもよいと思いました。関わり合いの中で育ちあっていく様子がどちらの先生の実践からも伝わってきました。環境と土台作り、少しでも取り入れたいと思いました。頑張って評価せずに!!（赤ペンを封印して）」「味覚教育をしていく中で、評価はどうするのか疑問に思っていたので、今日、佐藤雅子先生のお話を聞いて、単元の中のどの部分でどのように評価するのかを示していただき、少し自分の中でこうしたらよいという道筋が見えてきました。」などの感想があり、充実した学習交流会となった。　（文責　小谷教子）

東京都の活動報告

本実行委員会では、2016 年度内に 5 回実行委員会を開催し、活動補助費を有効に活用しながら、大きく分けて 2 種類の活動を実施した。

1　地域の小学生と保護者対象の縫い物、編み物講座の開催

2　会員相互の学習交流会の開催

学校教育の中で乏しくなっている生活やものづくりの学びの実践を地域の中で支援して、保護者等にその状況と学校教育の中での学びの充実を訴えるとともに、ものづくりの面白さや楽しさも伝えていくということを目的に、江戸川区の児童福祉施設で 2 回活動をした。

どの回においても、事前に教授リハーサルを行い、午後の実際の講座に備えた。また、講師陣については江戸川区として、ボランティア保険に加入していただいている。

詳細は以下に記載する。

A　2016（平成 28）年度の活動報告

Ⅰ　江戸川区の児童福祉施設で小学生とその保護者対象に縫い物、編み物講座の開催

1　小学生対象の中小岩小学校すくすくスクールでの活動

○　8 月 17 日（水）11:00～16:30

・内容―フェルトを使った小物づくりの製作の指導
　小物入れとボールを選択して製作する
　小物入れ　4 名　　ボール　6 名

・参加者―小学 1 年～小学 5 年 10 名、　保護者 3 名

・当日講師―東京実行委員 3 名、短大生 8 名、短大教員 2 名、会員 2 名、他 1 名　計 16 名

2　小学生対象の西小岩小学校すくすくスクールでの活動

○　12 月 26 日（月）11:00～16:00

・内容―フェルトを使った小物づくりの製作の指導
　小物入れ　8 名　　ボール　4 名

・参加者―小学 1 年～小学 6 年　12 名、保護者 2 名

・当日講師―東京実行委員 6 名、会員 1 名、大学生 2 名
　計 9 名

すくすくスクールでのフェルトを使った小物づくりの製作

3　以上の成果

どの回においても参加者は、一生懸命製作をし、ものづくりの楽しさと丁寧な指導に満足していた。参加者は自分の意志で参加していた。今後もまた製作していきたいとの希望を語っていた。家庭科を学習していない小学 4 年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの実感を得た。

Ⅱ　会員相互の学習交流会の開催

・日時―2017 年 2 月 11 日（土）13:30～16:10

・場所―女子栄養大学　駒込校舎 3 号館 3 階　3303 教室

・講演者―講演講師：平口嘉典先生（女子栄養大学栄養学部専任講師）

演題：「日本の食料・農業問題を考える―TPP 論議をふまえて」

13:35～15:05（90 分）　講演

15:05～15:20（15 分）　質疑

15:30～16:10（40 分）　情報交換

・参加者―東京実行委員　8 名、会員 5 名、会員外　4 名
　計 17 名

・ 成果―タイムリーなテーマだったので、参加者が予想していたより多かった。
基本的なことを整理して講演していただいたので、参加者の満足度が高かった。
和やかに情報交換もできてネットワークの重要性を感じた参加者が多かった。

B 課題

地域の縫い物、編み物講座については、これらの成果を今後どのように「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的に組み込んで地域の方にアピールしていくかである。

（文責 愛国学園短期大学 亀井佑子）

長野県の活動報告

■概要

平成 29 年 1 月 21 日（土曜日）10:30－13:00 長野県長野屋代南高校1F 調理室にて行った。「ベジフルアレンジメントを学び信州の野菜・果物をもっと楽しもう」と題して、ベジフルフラワーアーティスト・野菜ソムリエ上級プロの太田奈穂先生を講師としてお招きし、ご講演と実習指導をしていただいた。前半では、信州野菜・果物情報や野菜沢山メニュー等の開発動向やラッピング資材の情報や高校での実践例などを紹介していただき、後半では、プレゼントする相手を想いつつ製作する野菜を使ったブーケづくりの実習を行った。

■参加者の感想（抜粋）

テレビなどの媒体を通じてではなく、直接講師のお話を伺い、師範を見せていただくことができてよかった。これまでの調理の対象としてだけの野菜から、鑑賞物として見て楽しむもの・・と野菜に対する見方や価値観が広がった。実習に必要な材料が入手しやすい比較的身近なものばかりだったので、授業でも取り入れてできそうかなと思った。人数分の野菜を用意するのは高額になるかもしれないので、季節（旬）に合わせ、クラブや選択科目など少人数での活動で取り入れたいと感じた。テーブルコーデイネイトや盛り付けなどの授業と組み合わせても実施できる可能性があるかなと思った。“かぶ”そのものは料理（調理実習）の主役にはなりにくいので、おもしろいと思った。50 分で火も包丁も使わず、多くの水も不要で、調理バサミだけでできるので、簡単にできそう。“大根”は比較的調理実習の材料として使うが“かぶ”はほとんど使わない。めったに調理実習で使わない野菜をあえて、見たり香りを嗅いだりするという教育的な意味もあるのかもしれないと思った。フラワーアレンジメントと共通する部分と食べられるという鑑賞用の花とは違う部分とが共存する非常に楽しい教材だった。

■成果と課題

大雪の中での実施となったが、参加者（会員・非会員）・講師と相互に野菜の魅力等の意見交換をすることができた。講師の息遣いや野菜への愛情を感じる距離での実習であった。大変に素晴らしい研修にもかかわらず、参加者が少なく残念だった。今後は、広報手段を組み合わせることや、場所や日程の選定を含めて、いかに参加者を増やすことができるのかについて、引き続き検討していきたい。講師謝礼が高額であったため、今回は3つの団体からの協賛開催でやっと実現した。本会からも補助金をいただいたことに心より感謝申し上げる。次年度も、家庭科やものづくりの教育的意義や社会的役割を共有・発信できるような学習交流会を開催したいと考える。

（文責 長野県 福田典子）

静岡県の活動報告

静岡県では、2016 年 8 月 4 日(木)午後、静岡市産学交流センターB-nest にて、テーマ「地域の伝統織物「遠州縞」を教材にした家庭科の学びの可能性―「布の成り立ち」と「縫う」ことに着目して―」のワークショップを開催しました。「遠州縞」の成り立ちを知り、遠州縞を使った作品作りを通して、「布」や「縫う」ことに対する見方を広げ、明日の授業につなげるヒントを得てもらうことを目的にしました。講師は、酒井育子先生（元・浜松市公立小学校教頭）にお願いしました。当日は小・中・高等学校家庭科教員など、20 名の参加がありました。ワークショップ全体を通して、和やかな雰囲気の中で学習交流が行われ、参加された方々から「参加してよかった」とのお声を多数いただきました。以下に、感想を紹介します。

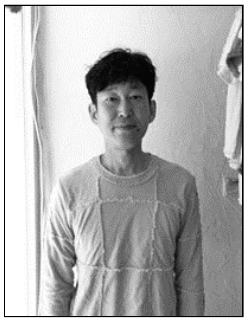
・ものづくりは、ものとの関係づくり、ものを作った人との関係づくり、それらを理解して自分づくりになる、三位一体の学びができます。さらに、モノや人を産み育てた地元の自然や歴史を感じとり、自分の将来の生き方にもつながる学びができます。総合と簡単に言わず、それらに触れることを押さえたいです。
・ものづくりを通して、自分の生活を見つめ直したり、家庭生活を豊かにできると思いました。また、伝統を知り、地域の特色を知り、それを広めたり、受け継いでいくことができます。小中学校でぜひ取りいれていきたいと思いました。
・ものづくりを教える私たち自身がものの成り立ちや歴史を学ぶことは意義のあることだと思いました。私たちが授業で取り入

れて、伝えていくことで、伝統をつないでいくことになります。今回は実際にものづくりを体験しながらでしたので、とても楽しく学ばせていただきました。針を動かしながらの家庭科のお話も楽しかったです。このような機会を作っていただいて、ありがとうございました。

・遠州縞がどのようなものか知らなかったので、とても勉強になりました。遠州縞のパワーポイントを使って歴史を学ぶことは、遠州縞そのものを知るだけでなく、女性が働くということや家族の幸せを願う心についても学ぶことができるので、とてもよいと思いました。実際に遠州縞の布を使ったコースターを作り、布を実際に触ること、布の扱いやすさをたくさん学ぶことができるよい活動であると思いました。

（文責　小清水貴子）

近畿地区の活動報告



日本家庭科教育学会近畿地区に配置されている滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県で合同の学習会を開催した。本年度は「京都で服をつくる」をテーマとし、京都で工房を構え、ガーゼを素材にデザイン、染め、縫製を夫婦で行っている中西達也氏を講師に迎え講演会を行った。

2016 年 12 月 17 日（土）に京都駅前のキャンパスプラザ京都会議室で開催した。会員の勧誘を兼ねて、同じテーマで別の講師による講演会を行った日本家庭科教育学会近畿地区会の学習会に引き続いて開催した。ポスターを作成し、会員や学会員に周知した。参加者は、26 名であった。

中西氏は、京都芸術短期大学服飾デザインコース卒業後、スポーツ用品メーカーのアシックスに就職し、スポーツウェアのパターンナーとして活躍した。その後、モノづくりを追求するため、装飾用美術陶板の製造メーカーへ転職、美術陶板やサイン陶板の製造に携わり、写真製版技術による陶板作製を担当した。そこを約5年間勤めたのち、渡英し語学学校に通いながら働き永住する予定であったが、ビザの関係で 1999 年末に帰国した。帰国後は、出身地の京都で着物の染め屋に就職。友禅の技法を習得し着物の販売を手掛ける。2002 年に、今まで習得した技術と経験を生かして工房ガラージを開設された。

中西氏は、自身の体験から日本の服飾業界の現状と問題点を詳しく話され、製造から販売まで手掛ける工房での仕事のあり方について、お伺いすることができた。夫婦二人の小さな工房を続けていくのは、たいへん難しいことであるが、国産のガーゼの布をバイアス仕立てにする独自の方法で服作りを行い、購入者の要望に応えて微調整を行う丁寧な服作りがリピーターを増やしている。グローバル企業による大量生産大量消費のファストファッションが席巻する服飾業界で、地域に根ざした良心的な服作りの在り方を学習する良い機会となった。

（文責　京都教育大　井上えり子）

熊本県の活動報告

2016 年4月2日（土）に九州中央リハビリテーション学院3号館で学習会を行いました. 参加者は、高校教諭 6 名、中学校教諭7名に私の 14 人です. テーマは「子どもの貧困」です。まず、熊本で子ども食堂「寺小屋カフェ」を準備中の佐藤さんに話していただきました。レジメに沿って簡単に報告します。

- 環境教育 NPO　緑の生活ネット……1994 年 1 月 26 日に設立し、楽しみながら取り組む環境教育をめざして「買い物ゲーム」や「エコクッキング」をやっていた。
- 「寺子屋カフェ」を始めようと思ったきっかけ……子どもの貧困が 6 人に 1 人。「食育」の延長線上に位置づけて取り組めないかと思い始めていた時に、親しい知人の「生活困窮」に遭遇。
- 子どもの貧困の実態、個人情報のベールに包まれて、貧困な状況で暮らす子どもたちの存在、実状等々がつかめない。関連すると思われる組織にあたってみたが、行政の縦割りが壁となり、当事者にたどり着けないもどかしさを感じている。
- 支援の方向……孤食、孤学、孤遊びの子どもたちに心温まる場を提供したい。親に受援力をつけてもらい、仕事のスキルアップで生活向上を支援したい。辛さを発信する人間関係を構築でき、同時にプライドを傷つけない配慮をしながら親への支援をしたい。食事を「施す」というスタンスはとりたくない。「当事者」であることが特定されにくい開催方法を取りたい。「お祭り」感覚で

やれば、人が人を隠すのではと考えている。「当事者」へではなく、「水前寺公園の参道でフェスタをやっているからどうぞ」と呼びかけている。毎回 100 食程度完食状態。しかし、その中の何人が「当事者」か不明である。

- 課題……継続していく力が何より大切。そのためには「人(=スタッフ)」「モノ」「金」「情報」が必須条件である。資金繰りは補助金、助成金、クラウドファンディングなどを考えている。フードバンク(食材の確保)として、田崎市場、JA 関連、県・市の農政課に声をかけている。反応はいいという感触を得ている。
- 熊本市子ども支援課主催「子ども食堂関連団体ワークショップ」に参加した。参加者 120 名という盛況。

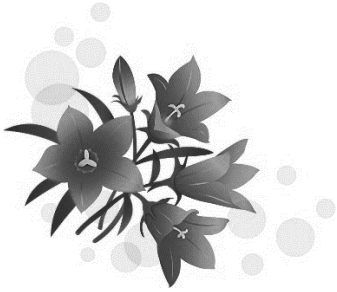
佐藤さんの報告を受け、意見交換がなされました。

- 教師の立場でいうと、貧困な状態で生きている子ども、例えば朝ご飯を食べてきていない子どもの存在は日々痛感している。その子たちにとって子ども食堂の意義は大きい。
- 「使ってほしい」と持ち込まれる食材はたくさんあるので、食材の購入費用はそうかからないと思う(佐藤さんの話)。

なお、この日も参加者が持参した食材を佐藤さんに渡したら、とても喜ばれました。

最後に、来年の担当者を決めて散会しました。今回の企画は現場教師の発案です。現場の感覚というか、子どもに接している感覚での内容だったからでしょう、今までになく参加者が多かったように思います。

(桑畑美沙子記)



【お詫びと訂正】

Ｎｅｔニュース第 11 号（2016 年 2 月発行）の第 6 回総会報告の「Ⅲ　会則改定」の記事に以下の④が抜けておりましたので、お知らせいたします。

「第７条（組織・運営）２）世話人会

④世話人会には、正・副（2 名）の世話人代表者をおく。」

◆世話人会からのお知らせ◆

①会費納入をお願いします。

2017 年度の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。お忘れなく納入お願いいたします。

②メールアドレス未登録の方、登録お願いします。

メーリングリストによって会員同士の情報交換を行っております。多くの皆様をメーリングリストに登録させて頂き、活発な活動を支援したいと考えています。なお、異動の少ない個人登録のメールアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。

③活動地区を選べます。

各会員の所属県はニュースレターの送付先の県となっております。どなたでも所属県以外の活動にも参加できますが、主な活動場所として所属県以外の県をご希望の方は、事務局までお申し出ください。希望する活動県の代表の方に連絡先をお伝えします。

④送付先住所に変更があった方は速やかに連絡ください。

毎回 20 名ほどが宛名不明で返送されておりますので、ご協力のほどよろしくお願いします。なお、送付先は変更の少ない自宅等の住所を指定して頂きたく願い申し上げます。

⑤お知り合いの方々をお誘いください。

「生活やものづくりの学びネットワーク」の HP から、リーフレットと入会申込書のダウンロードが可能です。

連絡用メールアドレス：seiktsu_nt@yahoo.co.jp

生活やものづくりの学びネットワーク

総会・シンポジウムのお知らせ

日時：2017年9 月24日（日）
13:00～15:40
時程：シンポジウム 13:00～14:50
総会 15:00～15:40
場所：東京家政大学
16号館２階
162B 講義室
東京都板橋区
加賀 1-18-1

＜シンポジウム＞

「学習指導要領と『家庭』、『技術・家庭』」

趣旨：2017年3月31日に小・中学校の次期学習指導要領が発表された。これまでの変遷も踏まえ、次期学習指導要領について読み解き、現在の社会状況における小学校「家庭」・中学校「技術・家庭」が果たす役割について各シンポジストに論じてもらう。小・中学校の教科の立場からだけではなく、教員を養成する大学での現状についても報告してもらい、「生活とものづくりの学び」に関する課題と展望について活発な意見交換の場としたい。

シンポジスト:

鈴木明子氏：広島大学大学院教育学研究科　教授，中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会　家庭，技術・家庭ワーキンググループ委員.

河野公子氏：全国家庭科教育協会会長

齊藤弘子氏：前家庭科教育研究者連盟会長

亀山俊平氏　和光学園和光中学校　産業教育研究連盟常任委員

コーディネータ

神山久美　山梨大学大学院総合研究部教育学域　准教授　日本消費者教育学会理事

生活やものづくりの学びネットワーク事務局
〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3F
日本家庭科教育学会事務局気付
email：seikatsu_nt@yahoo.co.jp
HP：http://www.geocities.jp/seikatsu_monozukuri_nt/